

令和 5 年 8 月 4 日現在

機関番号：12606

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K18479

研究課題名（和文）ポスト・スノーデン時代に於ける映像表現に関する日米事例の基礎研究

研究課題名（英文）Japanese-American Case Study on Visual Expression in the Post-Snowden Era

研究代表者

山田 健二（YAMADA, Kenji）

東京藝術大学・大学院映像研究科・研究員

研究者番号：80771899

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：2013年にエドワード・スノーデン氏が米国の市民のデジタルデバイスを通じた情報傍受活動の現状を暴露して以降、活動家や芸術家による大量監視社会に抗する表現活動の日米事例を調査し、国や地域差、文化圏の違いによる体系化や個々の詳細な分析を試みた。そこから考えられる時代的潮流や個々の活動の有効性、社会的影響力等を分析し映像論、身体表現論として纏めた。尚時系列の比較は60年代に日米で行われたビデオアートの潮流との接続を視野に入れ、2001-2006（アメリカ同時多発テロ事件以降）2007-2012（Wikileaks発足以降）2013-2022（スノーデン事件からCOVID-19パンデミック迄）とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的に国内外の社会学領域では2013年以降の大量監視社会にまつわる国家と市民の間に発生する人権問題や、監視から自身のプライバシー問題を巡る議論や法整備は十分に進んでいた。その一方で個々人のデジタルデバイスのカメラやGPS情報等の情報監視から身体表現を通して身を守るための方法に関しては、2007年以降目まぐるしく変化を続け、各自治体は使用する犯罪予知システム等への具体的な方法を示す芸術家や活動家は極めて少ない現状にあった。そういった背景を踏まえ、芸術家としての立場から日米の各事例を時系列に比較していくことは、身体表現による安全性・優位性の回復を一般社会により具体的に示すという意味で意義深い。

研究成果の概要（英文）：In 2013, after Edward Snowden revealed the current state of information interception activities through digital devices of American citizens, we investigated cases in Japan and the United States of expressive activities by activists and artists against the mass surveillance society. Yamada attempted systematization and detailed analysis of each activity by artists and activists on differences in regional differences, and cultural spheres.

It analyzed the trends of the times, the effectiveness of individual activities, the social influence, etc. that can be conceived from this, and compiled them into the theory of images and the theory of physical expression. The chronological comparison is based on the connection with the trend of video art in Japan and the United States in the 1960s. And this comparative study includes the terrorist attacks in the United States, after the start of Wikileaks, and from the Snowden incident to the COVID-19 pandemic.

研究分野：芸術一般

キーワード：ポスト・スノーデン時代 アート ビデオ・アート 大量監視社会 映像論 パフォーミング・アーツ 社会運動における芸術表現 ソーシャル・エンゲイジド・身体表現論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1：研究開始当初の背景

2001年に起こったアメリカ同時多発テロ事件を経て開始されたアメリカ政府による国内外の市民を対象とした大量監視の現状を、2013年にエドワード・スノーデン氏が暴露して以降、日米の活動家や美術家の表現活動の明確な比較研究や個々の活動の事例研究は殆どされてきた事がなく、それを「ポスト・スノーデン時代」という時間の区切りの前後や日米の地域間の芸術活動の比較研究として纏められた論考や論文は前例が少なかった。監視社会研究や情報工学で多く使われてきた「ポスト・スノーデン時代」という時間の枠組みを、文化芸術研究に持ち込んで論じられた文献や研究前例も少なく、いくつかある事例も社会学者が文化芸術研究との領域横断を試みるものであり、文化芸術研究や芸術学、美術史研究の視座から扱うものは極めて少なかった。そういった意味で2013年から前後10年程度の時間の幅をもって比較研究を進める好機であった。

2：研究の目的

前述した「ポスト・スノーデン時代」という時間的枠組みを基軸として以下の4つの期間を表現者や文化研究の視座から比較研究を行い、大量監視に抗する表現の変遷と社会への影響を明らかにする事が主な目的である。

- 1) 90年代初頭（一部それ以前の年代も含む）からアメリカ同時多発テロ事件が起きた2001年
- 2) 2002年からウィキリークスが発足した2007年
- 3) 2008年からエドワード・スノーデンがアメリカ政府による大量監視社会の現状を暴露するまでの2013年
- 4) 2014年から新型コロナウイルスによるパンデミックが起きた2020年から2023年

又、表現の対象を一個人に限らず、AIや情報機関等の組織を想定して実践された事例を手法を分類化し、それぞれの技術的变化に特徴付けられるプロジェクトのプロセスの中に生まれるノードを明らかにすることで、「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の様な社会変革を目的とした表現活動や実践が持つ社会的影響も含めた批評や評価に有効な幾つかの基軸を構築する。

3：研究の方法

・2018年度

日米で1990年から2019年までの「大量監視社会に抗する表現活動」の事例分析と研究を以下の3つの項目を基準に進め、それらを前述した4つの期間の時間軸にマッピングをし、同時に各活動の実践者にインタビュー形式で取材を行い論考を補足する資料として活用した。

- 1) 社会的有効性
- 2) 表現対象とその手法
- 3) 協働者（市民）との連携

又、東京やニューヨークのソーシャリー・エンゲイジド・アートの拠点である ASAKUSA Gallery や e-flux、iscp や各美術館のスペシャルコレクションから1次・2次資料をより草の根的な活動を中心に収集した。その根拠としてはオンラインのサイバー空間で行われる活動などの背景により地政学的な動機や手法の要因にフォーカスしていくためである。

以上を踏まえながらマッピングの作業を平面的なものから XYZ 軸（地理情報 =XY と時間 =Z）をもった立体的な 3D モデルとして制作する方法へとシフトしていき、マッピングの 3D モデルをオンラインの活動とオフラインの活動と 2 種類制作して映像上で重ねられるシステムとして構築した。

・2019 年度

研究中の事故により、研究に使用していたノートパソコンとバックアップ用の記録媒体が破損し、資料の再収集とマッピングの再構築を行なった。又個々の活動のプロセスを樹形図の様にモデル化し活動の手法とその社会的影響を分析する資料として制作し、モデル内の結節点であるノードの特性を分類化していった。分類と分析から「芸術的」、「美的」な観点からの批評が困難な社会的芸術活動の批評的な基準やその要素のあり方について研究を進めた。

・2020 年度

新型コロナウイルスの猛威により大幅に遅れるものの、2次資料の収集や論考の執筆などを中心に研究を進めた。

・2021 年度

事故によりデータが失われてしまった補足資料である芸術家、活動家、表現者等へのインタビュー資料の再収集をオンラインで進めた。国内外の渡航が8月まで難しい状況であったため、それまでは米国（ニューヨーク）でのより実践的な研究の計画や協働者への交渉の作業に費やし、8月末に渡米しニューヨークのブルックリンに位置するアーティスト・イン・レジデンス施設である iscp を拠点に街の中で「大量監視社会に抗する」表現活動を地元のフォトジャーナリストと共同で行うプロジェクトとして計画した。計画段階ではニューヨークを拠点とする大量監視社会研究について特化したジャーナリズムである「the Intercept」や人権団体であり非政府組織の「Amnesty International」および「Amnesty Tech」に所属するジャーナリストたちとの意見交換を対面で全7回の iscp でのスタジオ訪問の間で行なった。

・2022 年度

ニューヨーク市のブルックリンを拠点にニューヨーク市警察が使用する犯罪予知システムを模したシステムのホットスポットを現地のフォト・ジャーナリスト7名とで取り囲んで行う「ビデオ・シューティング・パフォーマンス」を行い、より実践的な研究を進めた。この手法の意図は当時コロナ禍で人が出歩かなくなった事による差別的事件を未然に防いでいくという意図と、事件の当事者とそれを取り囲むパフォーマーであるジャーナリストや表現者等が取り囲むサークルの中で事件の要因にもなっている個々が抱える苦難や社会的境遇を暴力から発話等の交換の中で解決していく場を簡易的に作っていくという2つの意図から実施した。8名のパフォーマーが記録したビデオファイルを素材にフォトグラメトリー技術で3Dモデルとして再現し、後日事件の当事者や家族、友人らが集うことができるメタバース空間として制作した。加えて初年度に行なった比較研究に2020~2023年の活動事例も追加した。

4. 研究成果

今回「ポスト・スノーデン時代の映像表現」、「大量監視社会に抗する映像表現」の背景にある歴史的変遷を比較研究する過程で制作した90年代から2020年代初頭までの時間の流れと、サイバー空間も含めた地理的・地政学的要素やその関係性の3Dマッピングモデルは、これまで評価や批評が難しかった市民らを含む社会への参加者との協働や、その環境を取り込みながら行う芸術実践の「社会変革」や「社会への影響」という観点から評価するひとつの方法に転換できる可能性の萌芽を発見できた事は、副なる成果として、今後も発展させてゆきたい画期的なものであった。この成果は日米の2国間の事例の比較研究というテーマにサイバー空間での活動が含まれてゆくことで立体的に制作せざるを得なかった研究手法がもたらしたものであった。転じて本研究が軸としている「日米事例の基礎研究」を通して浮かび上がるものは、寧ろ日米での事例の多くの共通点であるとも言える。2001年アメリカ同時多発テロ事件以降のアメリカ政府の大量監視の対象は国内外の見えざる敵であり、同様の監視システムの一部を日本政府も活用していることから、2国間の情報として計量された市民は監視や監視を通じたAI等によるレーティングというバイパスで存在であるとも言えるだろう。最も顕著なのは人権問題とその元凶の告発を行う監視カメラ等で行う身体表現であるが、アメリカでの事例は情報化された個人の行動や生体データをAIによる解釈を通して再提示する作品が多い傾向にあるのに対し、日本は環境問題や労働者の権利にシフトさせながら、同時に監視者のビジョンの向こう側に権力者や社会構造を告発するという事例も多く散見された。又、スマートフォンやPC、その他のデバイスに内蔵させるカメラやGPS情報を通して複眼的に記録・統合される大量監視と、個人のSNS等に蓄積され構造化する市民同士の相互監視社会の二重構造へのアプローチも特に2013年前後に活発化して行く。この構造に内包される2種類の監視者としての権力構造に対峙する方法も又、それぞれに対応する様に以下の2種の方法に峻別されその両方の要素を含む作品や実践が主流となってゆく。

1) オフラインでの映像インスタレーションや監視カメラの前で行われるパフォーマンス、ギャザリングによって映像的な様々なエビデンスを起点に、画角の発生する激情的表現を通して理論的な意識の組織化や社会運動争点を視覚化する方法。

2) オンラインのストリーミング放送や、監視カメラやモバイルデバイスのカメラのセキュリティーキー公開、ネットワークを通じたビデオフッテージの交換により、画角の中だけではなく監視者と被監視者の関係性を再提示し社会の鏡面として客体化させる方法。

そして記録されるデータを根拠とした時間の観念は、現在を生きる市民の中にある生政治を亀裂として、2つのアプローチを生み出して行く。

1つは「データ・アーカイブとして長期間保存される過去の事象」、他方は「データ学習から将来的に起こりうると予測される未来の事象」への実践として、2013年以降の活動の対象を分類することができるだろう。この2種類の過去が持つ時間的構造に対峙する方法も又、それぞれに対応する様に以下の2種の方法に特徴付けることができる。

1) 公共空間とサイバースペースを組み合わせた拠点の形成、又はサイバースペースの中に公共的環境を生み出し、その環境を拠点に発信される映像表現。

2) 犯罪予測がされたホットスポットや、スマートシティの端末となるロボットやデバイスとの関係性を動的な拠点として発信される映像表現。

前者は現代的歴史記述にエヴィデンスを組み込みながら社会の変容を促す活動として、後者は監視の構造に対する表現や学習データへ乱数的要素や生政治が複合して生まれる理性を介入させることを目的とした活動として特に米国での表現に顕著に表れている。

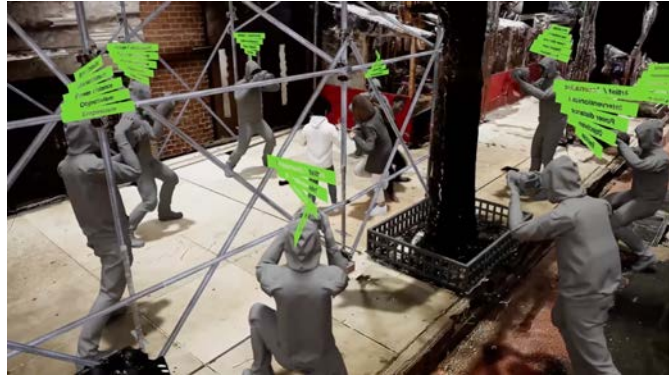


図 1: ニューヨークで実施した実践「another hacking predicted hate crime」のドキュメント 3D アニメーション映像作品

以上の様な研究を基盤に 2021 年にコロナ禍で空洞化したタイムズスクウェアで行なった「ビデオ・シューティング・パフォーマンス」は 2020 年の夏にニューヨーク市警察が黒人男性を殺害した事件を切っ掛けに再燃したブラック・ライブス・マター運動とニューヨーク市警察の軋轢の間に生まれた、ある意味で攻撃的な監視活動の現場に調査報道が持つ「客観主義」「権力距離」「介入主義」といった要素がフォトジャーナリストや表現者等によって持ち込まれ生まれたひとつの理性的空間を創出することができた。更にパフォーマンスを通して撮影した映像素材から生成した 3D モデルをメタバース空間でのギャザリングの場として 2 次的に活用し、当事者やその家族を交えて後日話し合う機会を実践として実現できたことも研究開始当初には予定していなかった段階まで研究を進めることができたという大きな成果である。



図 2-3: ビデオ・シューティング・パフォーマンスで撮影した映像から生成した 3D のモデルを VR の拠点として行われた当事者会議の様子

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 another hacking predicted hate crime - plan study_01
3. 学会等名 2021 Fall Open Studios
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 芸術実践を通じた公共空間の発掘-歴史遺構を拠点とする市民との共同制作をめぐる
3. 学会等名 筑波大学人間総合科学学術院
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 Mita Intercept_
3. 学会等名 Para Figurations
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 another hacking predicted hate crime - plan study_02
3. 学会等名 Spring Open Studios 2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 学生闘争と監視社会
3. 学会等名 慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 立て看板の転用/誤用で可能となる社会への介入
3. 学会等名 慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 大学立看による博物館への文化的介入
3. 学会等名 慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 MITA Intercept
3. 学会等名 慶應義塾ミュージアム・コモンズ「Commissioned by KeMCo 2020」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田健二
2. 発表標題 プロトコルを探るダイアログ：カルチュラル・レジスタンスをめぐって
3. 学会等名 慶應義塾ミュージアム・commons「Commissioned by KeMCo 2021」（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 クイーンズ大学 監視研究センター共同特別講演 スクリーニング+レクチャー「大量監視都市における表現の自由にむけて」	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------